香川県の地震・津波に関する防災風土資源

整理番号	香震１	嘉永７年７月満濃池決壊

災害種別	水害・治水	**地震・津波**	土砂災害	渇水・利水
場　　所	香川県仲多度郡まんのう町神野			
見所・アクセス	まんのう町の満濃池の堤は、嘉永７年７月に決壊したことが知られています。1854 年６月の伊賀上野地震でダメージを受け、漏水が始まった満濃池は一ヶ月足らずで決壊したと云われています。安政南海地震で壊れたものではありません。満濃池は国道 32 号から県道 200 号線を南に約 5.5km 行った所にあります。			

写真・図

写真１

写真２

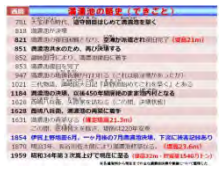


写真３

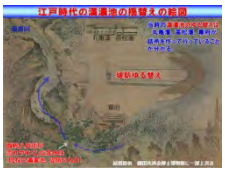


写真４

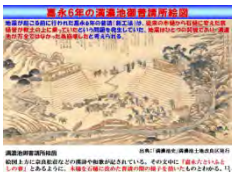


写真５

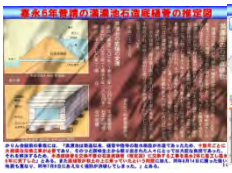


写真６

写真７

写真８

写真９

写真１０

解説文

満濃池の堤（**写真１**）は、嘉永７年７月に決壊したことが知られています。磯田道史氏は「天災から日本史を読みなおす」（中公新書 2014 年）の中で、嘉永７年７月の満濃池決壊について、「一八五四年六月の伊賀上野地震は、各地でため池を決壊させた。なんと遠方の香川県の満濃池（現まんのう町）（**写真２**）にダメージを与え、漏水がはじまった満濃池は一ヶ月たらずに決壊した。「数日前から決壊の前兆があったので人畜の被害はなかった」が「多くの田畝を損じた」と『高松藩記』にある」としています。

また、芳澤直起氏研究、嘉永７年７月満濃池決壊によると「満濃池は「大宝年中国守道守朝臣之所築也」とあるように古代より現在に至る迄、長きにわたる歴史（**写真３**）を持つ。しかし、その歴史は一様なものではなく、数多くの決壊と修復（**写真４**）が繰り返され、多くの先人の労苦により現在の姿となったのである。幕末期、満濃池は、嘉永七（一八五四）年七月に決壊し、その後十六年間切れることは無かった。」としています。さらに、各種史料から考察し、おわりに、「嘉永七（一八五四）年七月の満濃池崩壊を地震を原因とする説は、強烈な地震が発生した結果、満濃池のような巨大なため池をも破壊した。それほど地震は強烈であったと地震の脅威を強調しているが、地震が起こる前に行われた（**写真５**）従来の木樋から石樋に変えた新工法（**写真６**）が既に問題を発生していた。つまり地震はひとつの契機であり、満濃池が万全ではなかった為崩壊したと考える。（中略）決壊時、満濃池周辺の住人達は早々に警戒体制をとり、その結果、人的被害が最小限に押さえられていることがわかります。」と記されています。現在でも自然災害において被害規模の想定や、その被害発生に直面した際の対応について過去の事例が参考になります。東日本大震災では、福島県にある農業用のため池、藤沼湖（高さ 18m、長さ 133m の堤）が決壊しました。このとき多量の貯水が濁流となって下流の集落を襲い、死者・行方不明者８名、家屋全壊 22 戸等の甚大な被害が発生しています。以来、行政では、ため池のハザードマップを示し、住民の皆さんに日ごろから、浸水想定区域や避難経路を確認するなど、迅速な避難行動や災害応急対応を行えるように促しています。

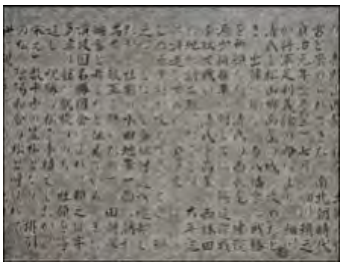
現在、満濃池もハザードマップ（(**写真７**）が公表されています。**写真８**は満濃池の下流から撮った航空写真にハザードマップから推定したおよその浸水エリアをフリーハンドで描いたものです。もし満濃池が決壊すれば、氾濫が広範に及ぶ被害が想定されていいます。特に直下流の『まんのう町』の皆さんは山津波のような激流の発生から命を守るため、首尾よく避難することが必要です。

ため池が多い四国地方では、ため池決壊を他人事や昔のことと考えてはいけません。南海トラフ巨大地震に備えて、もしもの迅速な避難行動に、ため池のハザードマップを活かしてください。

最後に、満濃池の歴史を物語る現在の余水吐と反対側にある空海の創案とされる余水吐きお手斧岩の跡(**写真８**)と昭和５年まで使用されていた満濃池余水吐の明治末期の写真(**写真 10**)を示します。

得られる教訓	ため池が多い香川県では、ため池のハザードマップとともに、過去の歴史災害も参考に、今後も発生するであろう南海トラフ巨大地震に備えることを教えてくれています。。								
教訓分類	被害防止	**準備**	災害対応	復旧・復興	自助	**共助**	公助	ハード	**ソフト**
時代	江戸時代以前	**江戸時代**	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	香震２	田潮八幡宮の由来碑

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	香川県丸亀市土器町東５丁目			
見所・アクセス	丸亀市土器町の田潮八幡宮の石碑にその由来が刻まれています。石碑には南北朝時代、細川頼之が将軍足利義詮の命により、細川清氏を攻めた時、・（中略）・社前の水田地帯一面に潮が満ち、敵軍を防いだので、田潮八幡宮と称されたと伝えています。これが 1361 年の正平南海地震の津波では、と最近研究者の間に出来てきます。 石碑には、国道 11 号を丸亀に向かい土器川手前、飯野の交差点を右折し約 1.5km 北に進んだ所のセコム丸亀支社横の交差点を右折して山側に約 400m 進むと鳥居があります。その奥に石碑があります。			
写真・図	 写真１  写真２ 写真３			
解説文	香川県丸亀市土器町の田潮八幡宮の名前の由来にまつわる言い伝えが、南海地震津波に関連しているのではという話があります。現在の海岸から 2km 程度入ったところにある田潮神社（**写真１**の右の写真）の石碑に、その由来が刻まれています。 その田潮神社の由来が刻まれた石碑刻字（**写真 2**）には、「南北朝時代、貞治元（1362）年 7 月、細川頼之が将軍足利義詮（よしあきら）の命により、細川清氏を攻めた時、・・・（中略）・・・全讃史には、はじめ源少将が攻めてきたとき、頼之は、しばらく当社付近へ退却したが、社前の水田地帯一面に潮が満ち、敵軍を防いだので、田潮神社と称された」と伝えています。確かに田潮神社前は現在でも**写真１**の右の写真のように低地となっています。沿岸部から近い田潮神社（**写真 3**）場所から考えると、このとき潮が満ちたと云うのが正平の南海地震津波であった可能性があります。 **写真１**の右図（1707 宝永地震報告書平成 26 年 3 月内閣府 P9）に示す南海トラフの地形・地質と巨大地震の履歴から見ると、古文書記録では、南海トラフ地震は、684 年の白鳳地震から 1946 年の昭和南海地震まで 9 回発生したとされ、その中で 1361 年の正平地震（しょうへいじしん）は、宝永地震や安政地震と同じように津波被害の著しい南海トラフの巨大地震津波だったと言われており、石碑刻字が 1362 年と 1 年ずれていますが、瀬戸内海の丸亀まで到達した正平地震津波の可能性があります。もしそうであるならばば、650 年以上前の歴史地震津波の瀬戸内海の津波到達地点を示す貴重な手掛かりなるとともに、四国の瀬戸内海沿岸域でも南海地震津波で大きな被害を受ける可能性が高いこと、今後の津波防災を考える自然災害伝承の素材になることを教えてくれています。			

得られる教訓	神社の名前の由来が刻まれた石碑の言い伝えから歴史地震の正平南海地震でこの付近まで津波が来た可能性を教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	香震３	宝永津波で高松、覆潮水高６尺

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水

場　　所	香川県高松市玉藻町
見所・アクセス	香川県の高松で宝永地震で「高潮来り平地之上六尺、御城下人家多破壊し、人馬死者多し」とあり、高松では 1.8m の津波があったとの記録が玉藻公園にあります。 高松城跡「玉藻公園」は、高松港に前にあります。
写真・図	 写真１ 写真２ 写真３ 写真４
解説文	香川県の津波の記録は、1707 年の宝永地震、1854 年の安政南海地震、1946 年の昭和南海地震の記録しか見当たりません。丸亀市の田潮八幡宮名前由来の伝承が 1361 年の正平地震の可能性は残っていますが、 宝永津波については、高松藩の公文書記録（香川叢書二〈続讃岐国大日記〉、翁嫗夜話巻之一下、消暑漫筆四（東京大学地震研究所編,1983)）（**写真１**）によると、高松では、「高潮来り平地之上六尺、御城下人家多破壊し、人馬死者多し」とあり、この津波で 1.8m浸水したことがわかます。 瀬戸内海における歴史南海地震津波の分布（山本尚明：瀬戸内海の歴史南海地震津波について、歴史地震、第 19 号(2003)）（**写真 2**）によると、瀬戸内海でも最大 3m 程度の津波があったこと、宝永津波で高松は 1.8m の津波があった図(**写真 3**)が示されています。 **写真 4** には、現在の高松市中心街と高松城との関係がわかる航空写真を示します。 最近の芳澤直起氏の研究「宝永地震における高松藩の被害状況（香川県文書館起要第 18 号 p41－54(2014）では津浪などの高松城下町の被害の状況など次のように述べています。「「翁嫗夜話」：来日夜小震数矣潮汐高干恒五六尺堤防多潰とあり、地震当日に小さな地震が数度発生し、潮位は通常より五、六尺（約 1.5～1.8m）高くなり、堤防の多くが破損されたと記されていることや「消暑漫筆」：高潮来たり平地之上深事六尺、翁嫗夜話の記載と同様、通常の潮位より六尺程度高い潮が来たと記されていることから、宝永地震という巨大な地震においては、瀬戸内海という内海においても高さが約 1.8m 程度の津波を発生させ、港の堤防を多くを破壊する被害を出している」としています。 四国の瀬戸内海沿岸は、淡路島や足摺岬などの東西の天然防波堤で護られ、津波は浸入しにくく、太平洋側に比べて小さくなりますが、その反面、東西の両海峡から入った津波は複雑な挙動をすることに注意が必要です。

得られる教訓	瀬戸内海の高松においても宝永地震の津波高などより、南海トラフの巨大地震では沿岸域が浸水する津波が来る可能性を教えています。

教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト

時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降

整理番号	香震４	宝永地震の高松藩の被害記録

災害種別	水害・治水	**地震・津波**	土砂災害	渇水・利水

場　　所	香川県高松市木太町
見所・アクセス	宝永地震で高松の干拓地に液状化、地割れなどの防潮堤防に被害があった記録が残されています。藩政時代、松島・木太付近の干拓地に干拓事業で造られた防潮堤上に志度街道を通したため、軟弱な地盤が宝永地震の激しい振動の為、地割れや液状化被害が発生したいうものです。現在の木太町の観光道路（県道155号線）が被災したというものです。
写真・図	写真１ 写真２ 写真３ 写真４ 写真５ 写真６ 写真７ 写真８ 写真９ 写真10
解説文	宝永地震は宝永四（1707）年10月4日に発生したM8.6の我が国最大級の巨大地震とされ、津波などで全国で死者は推定二万人とも言われています。高松（**写真１**）でも大きな被害あったことが史料(**写真２**)から分かっています。 芳澤直起氏の研究「宝永地震における高松藩の被害状況」よると、各種史料から、山崩れ（五剣山の崩壊時の様子)、液状化（地面が裂け、水が地面から湧いている様子)、地割れ（「地裂テ」「土地われる」）の被害の程度、津波高、津浪被害の様子、高松城下町の被害の具体的な場所などが詳しく述べられています。 藩政時代の松島・木太付近干拓地推定図（**写真３**）を示し、西嶋八兵衛や高松藩初代藩主の松平頼重の干拓事業で造られた防潮堤上に志度街道を通したため、軟弱な地盤が宝永地震の激しい振動の為、地割れや液状化被害が発生したのである。」としています。その図に登場する松島・木太付近の埋立（開拓地）の状況がわかる松島干拓地周辺略図（**写真10**）と現在の状況を**写真４**に示します。 昭和初期の観光道路の改良工事時の様子をまとめた高松今昔物語（国土交通省香川工事事務所）の昭和9年の地形図（**写真５**）やその当時の写真（**写真６、７、８**）に示すように、その周辺が農村低地であることがわかります。また戦後、米軍が撮影した高松市の航空写真（**写真９**）からも高松が塩田や水田があり、昔、海であった軟弱地盤の上に発展した街であることがよくわかります。

得られる教訓	現在は多くのビルや住宅が建ち元々の地形がわかりにくくなっていますが、自分が住んでいる本当の地形を知ること、「先祖帰り」の視点が必要であることを教えています。

教訓分類	被害防止	**準備**	災害対応	復旧・復興	**自助**	共助	公助	ハード	**ソフト**

時代	江戸時代以前	**江戸時代**	明治・大正	昭和30年代まで	昭和60年代まで	平成以降

整理番号	香震５	五剣山の山容

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水

場　　所	香川県高松市牟礼町・庵治町
見所・アクセス	高松市の第 85 番札所八栗寺の背面にそびえる五剣山が宝永地震により東の峰は崩壊して、現在の山容になりました。当時の様子を牟礼町史は、「五剣山の一峰崩れて落ちたり。火光雷の如く、其の響遠方まで聞えたり。」と大震動で崩落したことを伝えています。八栗寺には、八栗登り口から八栗ケーブルで行くことができ、その背面の五剣山を間近に見ることができます。
写真・図	写真 1 写真 2 写真 3 写真 4 写真 5 写真 6
解説文	香川県高松市牟礼町には、四国霊場第 85 番札所八栗寺の背面にそびえる五剣山（**写真 1**）があります。今から 306 年前の 1707 年 10 月 28 日に M8.4、8.6 ともいわれている宝永地震が発生し、５つの峰のうち東の峰（**写真 2**）は崩壊して、いまでは“四剣山”になっています。現在の五剣山の山容は**写真 1** のとおりです。八栗寺の正面から撮影した**写真 5** からも四剣山になっている様子がよくわかります。 香川大学長谷川修一教授らが調査結果（**写真 6**）では、北部（庵治町側）と南部（牟礼町側）転倒崩落してことが報告されています。当時の様子を牟礼町史は、「五剣山の一峰崩れて落ちたり。火光雷の如く、其の響遠方まで聞えたり。」と大震動で崩落したことを伝えています。今後、遭遇するであろう南海地震では、地震動が大きく、被害を受ける危険性が高いことを教えてくれています。 現在の五剣山の山容を南海地震動の警鐘ランドマークとして、郷土の大地の宿命を忘れず、もしもの時に備え「家具の配置や転倒防止」など家族の命を守る具体的な対策に活かしてほしいと思います。 この宝永地震は南海、東南海、東海地震の地震三兄弟といえる地震が同時に発生したもので過去の南海地震で最も大きなものであり、香川県でも大きな揺れがあったことを現在の五剣山の山容が教えてくれています。また地質構造的な特徴は、香川大学工学部　長谷川修一教授が社団法人四国建設弘済会平成 22 年 2 月発行の四国の地盤 88 箇所 80 番の中で、**写真 3、4** の資料のように詳しく紹介しています。

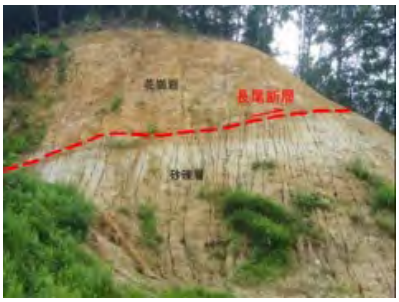
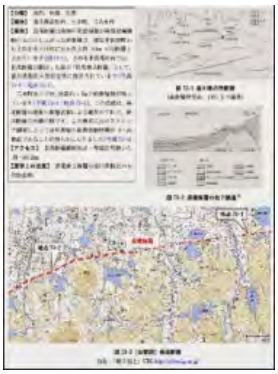
得られる教訓	現在の五剣山の山容は、南海地震動の警鐘ランドマークとして、香川県でも南海地震で大被害を受ける危険性があることを教えくれています。

教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト

時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降

整理番号	香震６	長尾断層

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水

場　　所	香川県高松市、三木町、さぬき市
見所・アクセス	長尾断層は、南側の花崗岩類が第四紀堆積物の上にのし上がった逆断層で、高松市香南町から、さぬき市大川町に至る長さ約 24km が活断層とされています。さぬき市長尾町西では、長尾断層が露出した崖が「長尾衝上断層」として、香川県指定天然記念物にしてされています。また三木町氷上では、比高約 1.５m の低断層崖が残っています。 長尾断層露頭地点へは、琴電長尾駅から南へ約 2km です。
写真・図	 写真 1  写真 2 写真 3
解説文	香川県高松市、三木町、さぬき市にわたる長尾断層は、南側の花崗岩類が第四紀堆積物の上にのし上がった逆断層で、高松市香南町からさぬき市大川町に至る長さ約 24km が活断層とされています。さぬき市長尾町西では、長尾断層が露出した崖が「長尾衝上断層」として、香川県指定天然記念物に指定されています。三木町氷上では、比高約 1.5m の低断層崖が残っています。この低崖は、長尾断層の最新の断層活動による地表のずれで、長尾断層の地震の跡(**写真 1**)です。この地点のトレンド調査によって長尾断層の最新活動時期が 9～16 世紀であることが明らかになりました。 香川大学工学部　長谷川修一教授が断層露頭写真やトレンチ調査写真などを示し詳しく四国の地盤 88 箇所 72 番で**写真 2**、3 の資料のように紹介しています。

得られる教訓	長尾断層の最新活動時期が 9～16 世紀であることが明らかになったことから、今後近い将来の活断層地震発生の可能性を検討することができることを教えています。

教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト

時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降

整理番号	香震７	南海地震地盤沈下対策・白鳥湛水防除事業竣工之碑

災害種別	水害・治水	**地震・津波**	土砂災害	渇水・利水
場　　所	香川県東かがわ市湊１６０２			
見所・アクセス	東かがわ市白鳥町の湊川河口付近の東側に白鳥自動車学校があります。その傍の右岸堤防の堤防内地に南海地震地盤沈下対策の白鳥湛水防除事業竣工之碑(**写真１**)があります。			

写真・図

写真１

写真２

写真３

写真４

写真５

写真６

写真７

写真８

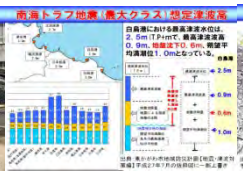


写真９

写真１０

説文

74 年前の昭和 21 年(1946)12 月 21 日 4 時 19 分頃、南海地震が発生しました。四国では太平洋側だけでなく、瀬戸内海側でも様々な被害が起こりました。香川県内では、昭和南海地震より死者 52 人、負傷者 273 人、家屋の全壊 608 戸、半壊 2,409 戸などの被害がでました。

昭和南海地震では高知では地震直後 1.2m の地盤沈下したことがよく知られていますが、意外と知られていないのが、瀬戸内海側の香川県や愛媛県でも地盤沈下があったことです。四国地方地盤変動調査報告書（昭和 26 年 7 月）の四国地方の地盤変動量分布図(**写真 2**) によると、高知では、55cm の沈下があったと記録されていますが、、瀬戸内海側の高松や松山でも約 30～40cm 程度の地盤沈下があり、引田でも 29cm の地盤沈下があったこと、その後の昭和 25 年のジエーン台風で高潮被害が頻発したことが報告されています。その結果、白鳥町（現東かがわ市）では白鳥の松原(**写真 3**)が浸蝕され、東部の新川流域の耕地も低地と化し、海水の侵入を見るに至りました。その後も排水不良に悩まされ、数十ミリの降雨でも田畑の湛水が甚だしく、住居は床上浸水が常襲化しました。

四国地方地盤変動調査報告書には、「香川県では、大川郡と三豊郡が沈下被害が大きい。このあたりの沈下量は 29cm、相生村(現在の引田町の一部)では沈下後その用をなさなくなった水門を通じ、又一部は弱小堤防を浸透あるいはオーバーして高潮が浸入し、水田約 35 町歩を 48 時間にわたって水底に沈めてしまった。その為収穫皆無と地盤沈下による被害の記述があります。また(**写真 4**) では、

○引田町大明神海岸（地盤沈下未復旧時）と（復旧時）の比較写真

○白鳥本町海岸（沈下後一応石積む護岸を築造復旧したが尚僅かの波浪にも背後を洗われ崩壊する）

○同一ケ所の（波浪は堤防を人家を洗う）

といった、地盤沈下のため波浪が堤防を越えて被害を与えている様子が報告されています。

また白鳥の松原周辺では、昭和 36 年（1961）9 月の第二室戸台風及び 10 月の集中豪雨でも 250ha が水没し、民家はほとんど床上浸水となりました。昭和 38 年に県営白鳥湛水防除事業が採択、地盤沈下対策として湊川河口付近の右岸側(**写真 5**)に白鳥排水機場（**写真 6、7**）が施工され、除塵機前に竣工碑(**写真 8**)が建立されています。このような対策を参考に、今後発生する南海トラフの地震・津波に備え、地盤沈下は瀬戸内沿岸地域でも発生することを前提に、地震対策は津波と地盤沈下を考えることが必要です。

東かがわ市の地域防災計画 【地震・津波対策編】によると、白鳥港における南海トラフ地震(最大クラス)想定津波高は、最高津波水位 2.5m(T.P+m、最高津波波高 0.9m、地盤沈下 0.6m、朔望平均満潮位 1.0mとなっています(**写真 9**)。東かがわ市の白鳥港の津波浸水予測図（**写真 10**）に地盤沈下対策と整備され現在も稼働している白鳥排水機場の場所を示します。

得られる教訓	昭和南海地震の発生により地盤沈下が起き冠水した水が長期間滞留、農地などに被害が出て、その後の地盤沈下対策として農地の復旧・復興には、排水施設の整備などが必要なこと、瀬戸内沿岸地域でも発生する地盤沈下と津波対策を考えることが必要を教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	**復旧・復興**	自助	共助	**公助**	**ハード**	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	**昭和 30 年代まで**	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	香震 8	ため池水害のランドマーク・『金毘羅の鞘橋』

災害種別	水害・治水	**地震・津波**	土砂災害	渇水・利水
場　　所	香川県仲多度郡琴平町７４３−１			
見所・アクセス	【金刀比羅宮】で有名な香川県琴平町には、町内を流れる金倉川に嘉永７年（1854）７月の満濃池決壊で流出し再建された屋根を持つアーチ型の木造橋の鞘橋(**写真１**)が、ため池決壊被害のランドマークとして存在しています。			

写真・図

写真１

写真２

写真３

写真４

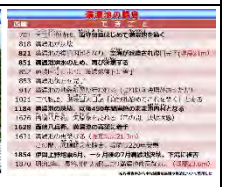


写真５

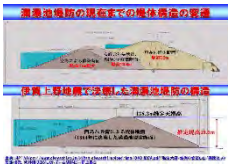


写真６

写真７

写真８

写真９

写真１０

解説文

この鞘橋は、明治２年５月に阿波麻植郡（現在の徳島県吉野川市）講中の寄進より再建され明治 38 年、橋の架け替え工事にともない現在の場所に移設されています。当時の鞘橋は、現在の鞘橋(**写真 2**)から約 300m 下流の金毘羅参道に正面の一之橋にありました。平成 10 年４月 21 日に国の登録文化財に指定されています。説明看板（**写真 3**）には、「琴平町内を流れる金倉川に架かる、全国的にも珍しい、屋根を持つアーチ型の木造橋。伝承によると、鞘橋は元禄年間頃内町一之橋の所に建設され、江戸時代には、幾度も洪水により流出。現在のものは阿波麻植郡講中の寄進より明治２年５月竣成。」とあり嘉永７年（1854）７月の満濃池決壊で流出し再建されたことが分かります。香川県仲多度郡まんのう町にある満濃池（**写真 4**）は、空海が改修したことでも知られ、現在、日本最大の灌漑用のため池であり、周囲約 20km、貯水量 1,540 万トン、堤高 32m の規模であります。国の名勝に指定され、６月のゆる抜きには多くの観光客が訪れています。満濃池の略史（**写真 5**）から満濃池が幕末の伊賀上野地震後に決壊し、その後 16 年間、明治初期まで復興されなかったことが分かります。**写真 6** 示すように満濃池堤防の構造変遷図から伊賀上野地震で決壊した満濃池堤防は、推定堤高が 21.3m で、現在の堤高 32m より 10m 程度低い規模であったことが分かります。この満濃池堤は、伊賀上野地震（嘉永７年（1854）６月）でダメージを受けた一ヶ月たらずの７月に決壊し、多量の貯水が濁流となって下流の集落を襲い大きな被害が発生したことが記録として残っています。その「嘉永７年７月の満濃池決壊」の決壊の遠因は、地震前年の嘉永六年の木樋を石樋に改めた普請にあったとされています。史料「讃岐国那珂郡満濃池近郷御料私領絵図」には、満濃池決壊後の下流の様子や満濃池の跡地に金倉川の川筋だけが残っている様子が描かれています。また，高松松平家歴史資料「靖公実録三」には、「大水となり放出した満濃池の水が、金毘羅の鞘橋を直撃し、さらに金毘羅の町内にも水が押入り、被害を与えた」という記録も残っています。明治３年の「満濃池水掛村々之図」(**写真 7**)には、嘉永７年地震決壊の復興後の満濃池とその配水流域村々を、高松・丸亀・多度津三藩と倉敷県金刀比羅宮社領の各支配ごとに色分けして描いた絵図では、枝分かれした配水路と各村々の位置関係が把握でき、当時の満濃池の広範にわたる配水地域が分かります。現在の満濃池が決壊した場合のハザードマップ（**写真 8**）が県や市町村から公表されています。それによると氾濫規模は、下流の多度津町まで浸水被害が及び、直下流のまんのう町では浸水深が 5m を超え浸水する地点もでる。琴平町の琴電琴平駅付近等(**写真 9**)で 2m〜5m の浸水が相次ぐと想定されています。**写真 10** は満濃池の下流から撮った航空写真にハザードマップから推定したおよその浸水区域をフリーハンドで描いたものを示しています。氾濫が配水地域と同じように広範にわたることが分かります。ため池が多い香川県では、ため池決壊を他人事や昔のことと考えてはいけません。現在でも自然災害において被害規模の想定や、その被害発生に直面した際の対応について、過去の地域の災害事例が参考になります。

得られる教訓	地震災害によって下流が大きな浸水被害を受けたこと、満濃池が長い間復興できなかった辛い経験と厳しい史実は、今後の南海トラフ巨大地震に備えた「ため池」の防災対策が必要であることを教えてくれています。								
教訓分類	被害防止	**準備**	災害対応	復旧・復興	自助	**共助**	公助	ハード	**ソフト**
時代	江戸時代以前	**江戸時代**	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			